

2022年度(令和4年度)学校評価自己評価表

城西中学校区	校番	福山市立泉小学校
最終更新日		2022年(令和4年)10月1日

Ⅰ 福山市

ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
 ビジョン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

Ⅱ 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	コミュニケーション力・表現力・忍耐力
○コロナ禍の中で、子どもたちが楽しみにしていた学校行事が今まで通りにできなくて残念だったが、色々と試行錯誤しながら取り組んでいただいた。 ○地域との連携は、コロナ禍で十分できないと思うが、学校内での学習や活動は、この状況だからこそできる取組をされている。個々のよさを認め合い、さらなる改善、取組をしていただきたい。	○小中の連携が図られ、落ち着いて意欲的に取り組む姿が多く見られるようになってきた。 ○「子ども主体の学び」の実現に向け、研究・実践を継続し、授業改善が進みつつある。 ●コロナ禍の中、小中合同の取組や地域での活動ができず、児童生徒の人間関係の広がりや地域への貢献の意識を高められなかった。 ●長期欠席児童が多く、小中が緊密に連携し、丁寧な取組を継続する必要がある。	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	地域に愛着と誇りをもち、心豊かにたくましく生きる子ども
		中学校区として統一した取組等	○自己肯定感を高める。(合同ボランティア活動・オープンスクール) ○コミュニケーション力・表現力・忍耐力をつける。(校区公開授業研究) ○健康への意識を高め、体力向上を図る。 (体力向上の取組・体力テストの分析・校区保健だよりの発行)

Ⅲ 自 校

ミッション	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)			コミュニケーション力・表現力・忍耐力
児童が自ら学び、相互にかかわり高め合う教育活動を行うことで、次世代を担う人材を育成する。				○自分や他者を理解し、自ら考え判断し、表現する子ども ＜表現力＞ 様々な場面で言葉や技能を用いる。 信頼できる知識や情報を収集し活用する。 ＜コミュニケーション力＞ 目標を達成するために、他者と協働する。 意見の対立や理解の相違を互いの違いを認め合いながら解決する。 ＜忍耐力＞ 感情をコントロールし、ルールを踏まえて建設的な意見を述べる。 見通しをもって計画的に行動し、軌道修正しながら最後までやり遂げる。
学校教育目標	めざす子ども像			
自ら学び、仲間とともにたくましく生きぬく子どもを育てる				
現 状	研究			学ぶことへの面白さを感じ、学びに向かう力を伸ばしていく授業づくり ～「認知のしくみ」から学びの質を求め、実を追求する～ ○「子どもがどう学ぶか」ということに視点を置き、児童自らが知っていることを使って、仲間と共に課題解決に向かうことを実践していくことで、児童が自信と意欲をもち、更なる学びへとアプローチしていく。
＜児童生徒＞ 自己表現の仕方やコミュニケーションの取り方に課題がみられる。問題解決にむけて、児童一人一人の思いに寄り添いながら取り組んできているが、朝、定刻に登校することが難しい児童もいる。また、学力面においては、各種調査において、結果を上回る学年があるものの全体的に活用問題に課題がみられる。新体力テストは、昨年度は限られた項目しかできなかったが、長座体前屈などに課題がみられ、体育の授業にストレッチ運動を取り入れて実施している。 ＜授業＞ 組織的に研究主任を中心として、子どもがどのように学ぶかの視点で互いの授業を見合い研修を行ってきた。その結果、児童の学びをどうコーディネートするかに課題意識が高まってきている。引き続き、児童と教師が学ぶことの面白さを感じることができる授業の実現にむけ、互いの授業を見合い議論しながら、日々の授業づくりを進めていく。	めざす授業の姿			○児童と教師が共に学ぶことの面白さを感じることができる授業 ・児童一人一人が自分の知ってることを使って課題に取り組み、教師や仲間とともに課題解決していく授業。 ・個の学びを見取り、児童が「できた」「わかった」「次はこうしてみたい」という思いや自信がもてる授業。

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立泉学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	70% 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	70% 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
1	課題を見出し、解決に向けて挑戦する意欲と諦めずに学び続ける力を付ける。	★	見直し	児童一人一人の知っていることを生かした学びを展開し、児童が自らの伸びや成長を実感することができる。	• 学びの質を高めるため、学習端末や学校図書館の活用、体験活動など積極的に取り入れる。 • 一人学びと集団での学びをバランスよく取り入れ、児童の学びのBefore・Afterを交流する。	• 児童の学びの見える化を図り、積極的に具体物を掲示したり学びの様子を通信で発信したりしている。 • 自己肯定感に係る質問に肯定的に回答した児童の割合82%	• 学びの見える化を図った教職員は、80%であった。児童の学び方は様々であり、学びやすさを考えた授業改善が必要である。 • 自己肯定感に係る質問に肯定的に回答した児童の割合は、76%であった。学びの振り返りが不十分であったと考える。	3	3	• 児童一人一人にとって学びやすさとは何か、障壁となっていることを考えた学びの環境づくりに取り組む。 • 一人一人が知っていることを生かした学びを展開し、自らの学びを振り返ることを行う。					• 自分のペースで学ぶことができたどうかを見取るために、振り返りにその項目を入れる。
1	誰もが自分らしく学ぶことができる学校づくりに貢献できる。		見直し	学校生活をよりよくするために、自分たちができていることを考え行動することができる。	• 日々の生活や行事等様々な場面で、相手意識をもたせてコミュニケーションの機会を設定する。 • 学校内、教室内で一人一人の居場所づくりに努め、自他の思いや考えが大切にされる学級集団を組織する。	• 児童会や委員会、各学級から全校へ取組を発信したり、学校生活をよりよくするために自分で考え行動している児童を紹介(評価)したりしている。 • 学校は安心して生活ができる場所であると捉える児童80%以上	• 児童会を中心に挨拶運動や掃除強化週間などを行い、学校の諸課題の改善に向けて自発的に取り組むことができた。また、活動を通して意欲的だった学級を紹介するなど肯定的評価を行い価値づけを行った。 • 学校は安心して生活ができる場所であると肯定的評価を行った児童は約86%。	4	4	• 活動の後、児童への評価を行ったり、全体での振り返りを行ったりすることで、見通しや意欲をもたせ、継続的な活動に繋げる。 • 学校の諸課題については、全教職員・全児童へ問題提起を行い、意識統一を図りながら、各学級で考えた改善策を実践していく。					

[illegible]

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評価点	評価基準	評価点	評価基準	評価点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。